

I 2012年度認証評価における指摘事項（努力課題）

該当なし

II 2016年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016年度大学評価結果総評】

人間環境学部における大学評価委員会の評価結果に対する対応は、履修状況の確認、研究会（ゼミ）、成績の把握についての現状説明及び対応方法が明確に示されている。全体として、学部独自の委員会による組織的な教育を実施するための運営が行われており、カリキュラムの見直しや次世代教員によるFDの推進も計画されており、評価できる。特にカリキュラムについては、国内外のフィールドスタディ、少人数でのびやかに各テーマを掘り下げる研究会（ゼミ）、地球市民へのステップアップをテーマにした英語学位プログラム等も実践されている。特に5つのコースとそれを軸にした幅広いカリキュラム構成は、学際的教養と高度な問題解決能力を涵養するものとなっており、また、リテラシー科目と展開科目の構成も充実している。学部としての組織的な取り組みとして、非常に細かく履修指導、学習成果の可視化、成績が不振に陥る前のケアも行われており、今後の成果が大いに期待されることである。新コースの履修状況の確認とコース修了論文の提出状況の把握を早急をお願いしたい。学部の特色を活かした外国人留学生に対する今後の修学支援も、引き続きお願いしたい。非常に良い取り組みが行われていることは、学部案内、履修の手引き、シラバスからも確認される。過去5年間の収容定員充足率が平均1.12は注意が必要である。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

人間環境学部は、全学の方針（HOSEI2030）や宣言（グローバル化、ダイバーシティ宣言など）を踏まえた学部長期構想を策定し、学部運営および改革に継続的に注力している。2016年度は英語学位プログラム開設、短期海外留学のSAプログラム、実践知を育むための新科目を創設した。今後も社会人の継続的な学びに向けた新プログラム（RSP）設置準備など、新たな試みに学部をあげて取り組んでいる。

多様化する学生の学びを支えるため、履修／学習指導およびケアを行う体制を引き続き整備している。特にコース制については、2016年度にスタートした新制度を踏まえ、カリキュラムマップ・ツリーの整備充実と並行し、履修状況の確認、コース修了論文の提出状況の把握を通じて、学生の動向に十分注意を払うこととする。

学生受け入れについては、戦略構想委員会にて複数の政策文書を作成し、定員充足率に留意しつつ今後の入試対応の基盤を整えた。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

人間環境学部は、全学の方針等を踏まえた学部長期構想を策定し、学部運営および改革に継続的に注力されており、2016年度は英語学位プログラム（SCOPE）開設、短期海外留学のSAプログラム、実践知を育むための新科目を創設し、今後も社会人の継続的な学びに向けた新プログラム（RSP）設置準備など、新たな試みに学部をあげて取り組まれている。2016年度の大学評価結果において、新コースの履修状況の確認と修了論文の提出状況の把握について指摘を受けたが、これらへの対応として、カリキュラムマップ・ツリーの整備充実と並行して、履修状況の確認、コース修了論文の提出状況の把握を行うことが記述されており評価できる。上記の、新たなプログラムや構想に関して、概ね良好な取り組みと評価できる。

III 自己点検・評価

1 内部質保証

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2016年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】 ※箇条書きで記入。

- ・2016年度質保証委員会は、4名の教員と執行部によって実施された。
- ・第1回質保証委員会（2016年度自己点検・評価について） 2016年5月11日実施
- ・第2回質保証委員会（2016年度末自己点検報告について） 2017年3月1日実施

(2) 特記事項

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

人間環境学部では、2016年度は学部教員4名と執行部により構成される質保証委員会が2回開催された。内容は、「2016年度自己点検・評価」と「2016年度末自己点検報告」についてと最低限ではあるものの、適切に活動しているといえる。

2 教育課程・学習成果

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

- 所定の単位の修得により、以下の水準に達した学生に対して「学士（人間環境学）」を授与する。
- 1. 実践的な語学や情報処理の基礎的な能力、文献購読・文章作成・コミュニケーションの基礎的な能力を身につけている。
- 2. 持続可能な社会に関する幅広い教養を身につけている。
- 3. 持続可能な社会に関する学際的かつ総合的な専門性を身につけている。
- 4. 持続可能性に関して具体的な課題について考察した上で、適切な判断を導き、それらを文章や対話を通じて表現することができる。
- 5. 社会の多様な人びとに対して共感する力と、現場（フィールド）から主体的に学ぶ姿勢を身につけている。

①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

はい いいえ

2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【教育課程の編成・実施方針】

■初年次教育の仕組み

初年次教育については、春学期開講の「人間環境学への招待」により、学部教育の全体像を理解し、人間環境セミナー、フィールドスタディにより、社会から実践的に学ぶ経験を経て、秋学期には基礎演習によってリテラシー能力を高めながら、自らの専門的な学習の方向性を模索し、2年次からのコース選択・登録と研究会履修に接続するサイクルを形成する。さらに、学部教育と並行して、初年次から4年次まで市ヶ谷基礎（ILAC）科目により、幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する。

■教育課程の編成と特色

持続可能性を包括的に捉えた上で、「人間と環境の共存」、「人間と人間の共生」について専門的に学習することを目的とする「展開科目」では、社会科学・人文科学・自然科学の科目群を学際的に組み合わせ、講義科目を体系的に編成する。本学部の教育課程の編成は、5つのテーマ領域から成るコース制を中心とする。学生が中心的に学ぶコースを自主的に選択し、学際的かつ総合的な教養と専門性を基盤としながら特定のテーマ領域を探究するカリキュラムにより、T字型さらにU字型の人材を育成することがコース制の目的である。

■学部・学科カリキュラムの構造

初年次教育を経て、2年次より、5つのコース（サステイナブル経済・経営コース、ローカル・サステイナビリティコース、グローバル・サステイナビリティコース、人間文化コース、環境サイエンスコース）から1つのコースを選択・登録し、コースコア科目を履修することで各コースの専門性を深めつつ、コース共通科目およびコース連環科目により、学際的かつ総合的な教養と専門性を獲得する。

また、コース制と連動した研究会を設置し、少人数で集中的な学習を積み重ねてゆく。さらに研究会修了論文とコース修了論文は、卒業に向けて各学生が主体的に研究テーマを探究していく機会とする。

本学部の特色を反映したフィールドスタディおよび人間環境セミナーは、社会との交流・連携を通じた最新かつ実践的

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

な知識や、他者に対して共感する力を獲得しながら、自らのキャリア形成のための意識づけの機会となるキャリア教育科目としても位置づける。

さらに、グローバル・サステナビリティコースのコースコア科目、フィールドスタディの海外コース、SA、グローバルオープン科目、英語学位プログラム（SCOPE）との相互乗り入れ科目等の編制により、グローバルな人材への体系的な教育機会とする。

①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。

はい いいえ

②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。

はい いいえ

【根拠資料】※冊子名称やホームページURL等。

- ・法政大学 HP (http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/gakui_juyo/gakubu.html#07)
- ・人間環境学部 HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/rinen_1.html)
- ・2018年人間環境学部パンフレット
- ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き

③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。

S A B

(～400字程度まで) ※検証を行う組織(教授会や各種委員会等)や検証の時期等、検証プロセスを記入。

- ・教育目標を含む学部の理念や方向性については、戦略構想委員会において議論、検証を行っている(2016年度開催回数6回)。
- ・それらの理念/目標を各種方針および教育課程の編成・実施方針に反映する作業は、カリキュラム基本制度において議論、検証を行っている(2016年度開催回数5回)。
- ・例えばフィールドスタディのように学部に特徴的なカリキュラムに関しては、独自の委員会を設置し、カリキュラム基本制度委員会と連携しつつ理念/目標の実施が個々のカリキュラム(科目)にまで十分に反映できる体制をとっている。

【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・2015年度以降、理念/目標など基盤の方針を議論する場(戦略構想委員会)とそれらの実施・運営を議論する場(カリキュラム基本制度委員会)の役割分担を明確にしたが、2016年度にはILAC小委員会をカリキュラム基本制度委員会の元に設置し、カリキュラムの全体性の確保とILACカリキュラム改革に対応する体制を整備した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・戦略構想委員会ニュース
- ・カリキュラム基本制度委員会議事録
- ・2010～2016年度各種委員会名簿

2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

学部の専門科目を体系立て、段階的な能力育成が可能な環境を整えている。加えて5つのコース制により、学生の学びの志向性を明確にしている。

従来からある学部の特色ある重要科目「フィールドスタディ」と「人間環境セミナー」に加えて、2016年度にはPBLをより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく「キャリアチャレンジ」を新設(2017年度より開講)した。これら「フィールドスタディ」と「人間環境セミナー」、「キャリアチャレンジ」を2014年度入学生から選択必修科目(合計6単位以上修得)とし、学部生全員に対して、学部の特徴的な学びを促すことを制度化している。

また、2015年度に「コース修了論文」を設置し(2016年度から運用開始)、すべての学生に対して「卒業論文」に該当する単位を修得できるように制度変更を行った。

加えて、グローバル化に対応する能力を涵養するため、「Study Abroad(SA)」プログラムを2016年度から設置し、海外短期留学を可能とした。同時に2016年度に開講した英語学位プログラム学生との共創の場として、新規科目「Co-Creative Workshop」を設置し、英語でアクティブラーニングを実施する機会を創設した。

【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

新規取り組みとして以下の3つがある。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・「キャリアチャレンジ」の新設（3団体との覚書に基づく学生の派遣。2017年度より開始。） ・「SAプログラム」の設置（2017年度秋学期に第1期の派遣予定） ・SCOPEプログラムとの共創授業「Co-Creative Workshop」の設置 		
<p>【根拠資料】 ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き ・2017年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） ・人間環境学部 HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/e-system/index.html) ・SAプログラム説明会資料 ・キャリアチャレンジ説明会資料 ・提携団体との覚書 		
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S	A B
<p>(～600字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。</p> <p>カリキュラム上、教養科目（ILAC科目）と学部専門科目は適切に配置され、それぞれにおける必修／選択必修等の位置付けがなされている。それらの順次性・体系性はナンバリングおよびカリキュラムツリー・マップを利用して可視化されている。また各教員が専門分野の視点からどのような科目履修をすすめると良いかを提示する「履修モデル」と呼ばれる試みも継続してきた。</p> <p>学部専門科目の学びにおいては、コース制がそのコアとなる。コースの趣旨及び教育目標をより明確なものにするため、2015年度にカリキュラム基本制度委員会でコース制の編制に関して検討を行い、コース名を変更した（サステナブル経済・経営コース、ローカル・サステナビリティコース、グローバル・サステナビリティコース、人間文化コース、環境サイエンスコース）。2016年度入学者から、2年次進級時に全学生を各コースに所属させた上で、コースコア科目（10科目20単位）を選択必修とした。また、学際的な学びを担保させるために、コース共通科目（5科目10単位）も選択必修とした。さらに、選択必修科目である「人間環境セミナー」は従来土曜日に開講していたが、多様な学生ニーズに対応するために、2016年度は平日夜間にも開講することになった。</p>		
<p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム基本制度委員会の元で、カリキュラムマップ、ツリーを作成し、ナンバリングとあわせてカリキュラムの順次性・体系性をより明確なものとした。 ・とりわけ、コース制の枠内におけるカリキュラムツリーについては、コース制の実をあげるために重要と考えており、2016年度に策定した原案を、新設予定のカリキュラムツリー／マップ小委員会で集中的に議論のうえ整備をすすめる。 		
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き ・学部 HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/e-system/index.html) 		
③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	S	A B
<p>(～400字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <p>人間環境学部は学際学部であるため、幅広い知識と総合的な判断力を涵養することが、教育課程の編制の基本である。具体的には、学部の特徴的な科目である「フィールドスタディ」および「人間環境セミナー」などにより、実践的に上記の能力を涵養することができる。加えて2016年度には「キャリアチャレンジ」の導入を決定し（2017年度開講予定）、学生が現実の社会に身を置く学びの機会の充実を図っている。また、特に豊かな人間性を涵養する教育課程上の対応として、コースのひとつに人間文化コースを設置した。同コースの科目はすべて他のコースの学生も履修することができる。</p> <p>他にも、「研究会」においても各担当教員の専門分野の課題を足がかりに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培うための教育が提供されている。さらに「人間環境特論」という講義科目を利用し、変化する時代や環境に応じた科目を設置し、学生に対して必要な能力涵養の機会を提供している。</p>		
<p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新科目「キャリアチャレンジ」を設置し、学生が社会に身を置き現実の問題に対処する機会を設けた。学生が実践知を学ぶ機会であると同時に、大学での学びをさらに自覚的にすすめるための契機となることが期待される。 		
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部の理念／教育目標（2017年度 人間環境学部履修の手引き） 		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 講義概要 (シラバス) ・人間環境学部 HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/index.html) ・キャリアチャレンジ説明会資料 	
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>(～400字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p>	
<p>初年度教育は二つの柱からなっている。一つ目としては、①人間環境学部での勉学の方向づけ、②人間環境学のアプローチの多様性を学ぶことを目標とする「人間環境学への招待」を必修科目として春学期に設置している。二つ目には、秋学期に少人数制／担任制の必修科目「基礎演習」を設置し、種々のリテラシー教育、学生としての勉学／生活の進め方の指導を行い、初年次教育の継続性を構築している。2015年度から社会人学生専用の「基礎演習」を設置した。また、1年次の夏休みから「フィールドスタディ」を履修でき、PBLを初年次教育から行うことになっている。</p>	
<p>高大接続への配慮としては、理科系分野のリメディアルの要素も兼ね備えた科目として「サイエンスカフェ」が設置されている。また2016年度からは従来秋学期の「基礎演習」において行われていた、大学での勉学に必要な基礎的リテラシー教育（リーディングとライティングの基礎）を、春学期の「人間環境学への招待」に移設し、よりスムーズな大学教育への接続を可能とするよう配慮している。</p>	
<p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・2016年度からは従来秋学期の「基礎演習」において行われていた、大学での勉学に必要な基礎的リテラシー教育（リーディングとライティングの基礎）を、春学期の「人間環境学への招待」に移設し、よりスムーズな大学教育への接続を可能とするよう配慮している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 講義概要 (シラバス) ・人間環境学への招待 講義概要 	
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>(～400字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p>	
<p>コース制において、グローバル・サステナビリティコースを設置し、学生の国際性を涵養するための教育課程／科目群をより明確にしている。なおコース制においては、自らが所属しないコースの科目も履修可能であり、国際性を涵養する科目はすべての学生に開かれている。SGUに伴い全学で設置されたグローバルオープン科目も、自由科目の枠内で(卒業所要単位として)受講が可能である。</p>	
<p>他には、①「海外フィールドスタディ」、②SAプログラムがある。①海外を訪問する「フィールドスタディ」コースを年間3、4コース設置し、学生が国際性を涵養する機会を提供している。昨今の海外事情の変化に対して学生の安全に留意し、随時コースの見直しを行っている。また多くの学生に参加機会を提供するため、海外フィールドスタディ奨励金制度を設け、学生に対する旅費の補助を行っている。②は2016年度に新設された短期海外留学の機会の提供である。こちらについても奨学金による補助を行っており、広く学生に参加を呼びかける体制を整えている(2017年度秋学期から派遣開始)。</p>	
<p>語学教育では、専門科目内のリテラシー科目として、「アクティブ語学(英語)」と「テーマ別英語」を開講している。「アクティブ語学」では、初級会話・中級会話・上級会話・ビジネス会話と、レベル別および目的別に授業を展開し、学生の発信型英語コミュニケーション能力の向上に寄与している。「テーマ別英語」では、学部の専門分野と関わり深いテーマを英語で講義・ディスカッションを行なうなど、学問的内容の学習と語学力の涵養を同時に目ざす融合型アプローチを実践している。</p>	
<p>2016年度秋学期から開設された英語学位プログラム(SCOPE)に設置された、「Co-Creative Workshop」においては、留学生とともに英語でアクティブラーニングに取り組む機会が提供される。</p>	
<p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	
<p>上記の通り、以下の3点を2016年度より新しくカリキュラムに取り入れている。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・SAプログラムの設置(2017年度秋学期より派遣開始) ・「Co-Creative Workshop」の設置 ・グローバルオープン科目の利用 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き ・2016年度 人間環境学部 講義概要 (シラバス) 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・法政大学人間環境学部海外フィールドスタディ奨励金規程 ・法政大学人間環境学部海外フィールドスタディ奨励金取扱細則 ・SAプログラム説明会資料 ・人間環境学部 HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/ryugaku/index.html) 	
⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S A B
<p>(～400字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>キャリア教育に関しては、本学部が基本理念に掲げる「社会との交流・連携」を展開することができる「研究会」・「人間環境セミナー」・「フィールドスタディ」などを社会人基礎力の修得の場として位置づけており、「人間環境学への招待」でも、キャリア教育の導入教育を実施している。さらに、「キャリア入門」、「自治体職員をめざすための研究会」などのキャリア教育に関連した科目を設置しながら、カリキュラム体系の特性を活用した総合的な実施を進めている。</p> <p>2016年度にはPBLをより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく「キャリアチャレンジ」を新設(2017年度より開講)した。</p>	
<p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2016年度にはPBLをより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく「キャリアチャレンジ」を新設(2017年度より開講)した。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き。 ・2017年度 人間環境学部 講義概要(シラバス) ・キャリアチャレンジ説明会資料 	
2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S A B
<p>【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次教育では、入学時のガイダンスや必修科目である「人間環境学への招待」及び「基礎演習」を通じて、全員に導入的な履修指導を実施している。 ・「人間環境学への招待」では、授業構成がコース制の説明と関連科目のイントロダクションになるように計画されており、コースに沿って担当教員を配置している。 ・「研究会」や「フィールドスタディ」などについては、説明会やガイダンスを実施し学生の履修意欲の向上に努めると同時に履修指導を行っている。 ・2年次からは、学生が専門性を意識して修学できるようにコース制を採用している。 ・オフィスアワーを設け、学生個々の履修相談に応じる体制をとっている。 ・学習における専門性を意識した「履修モデル」を学部として作成している。特に2年次はじめのガイダンスでは、コース制・履修モデル・研究会の有機的なつながりに力点を置いて説明している。 ・コース別の科目の履修状況について、データで確認をしている。 ・2015年度に履修指導体制を再検討し、留学生および社会人学生の新入生(編入学含む)に対するガイダンスを実施することにし、2016年から実施した。 	
<p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・より適切な修学支援のため留学生および社会人学生の新入生(編入学含む)に対するガイダンスをそれぞれ実施した。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き ・2017年度 人間環境学部 講義概要(シラバス) ・コース別履修状況 ・人間環境学の招待 講義概要 ・「研究会」、「フィールドスタディ」説明会関連資料 	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S A B
<p>(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。</p> <p>初年次教育の「人間環境学への招待」では、大学教育における講義の受け方、ノートテイキングの方法などを講義している。2016年度からは、1年次春学期の講義に対応すべく、リーディング、ライティングスキルについても指導することとした。同じく初年度必修科目の「基礎演習」では、図書館実習や、学生自らが学習する態度を身につけるノウハウを提</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

供し、少人数教育を経験させ、本学部の学習指導上、重要な位置づけにある「研究会」での学びの基礎を習得させる。本学部では、専任教員は最低1つの「研究会A（通年）」（2～4年までが継続参加する少人数教育）を担当し、卒業論文にあたる「研究会修了論文」の指導を行う。なお、ゼミに所属しない学生に対して、卒業論文に相当する「コース修了論文」を執筆できる制度を2016年度より導入した。その他、オフィスアワーの時間を中心として、「履修モデル」に関する質問等、学習の方法に関する学生の質問に応じる体制がある。また成績不振者に対しては個別面談などにより、履修／学習上の問題解決に取り組んでいる。

【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・「人間環境学への招待」におけるリーディング、ライティングの基礎の導入
- ・「コース修了論文」の導入
- ・「成績不振」学生に対する学習指導制度対象者の拡充（個別面談の対象となる学生の範囲を広げたもの）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き
- ・2017年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）
- ・「成績不振」学生に対する学習指導制度対象者の基準変更について

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。

S A B

（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。

すべての授業において授業外で行うべき学習活動（準備学習等）が指示されており、その内容はシラバスによって周知されている。少人数教育である「研究会」では、学生が予習・復習を行ってこることが前提となっており、「研究会」の中には、サブゼミを開設している場合も多い。これら正規の研究会以外の時間において、学習（予習・復習）を行うことに対して、担当教員が適宜、指示をしている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）

④1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。

はい いいえ

【履修登録単位数の上限設定】※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位数の上限を記入。

- ・2012年度入学生からは1年間49単位、春学期30単位（秋学期は49-春学期登録単位数、上限30単位）が履修登録上限である。
- ・2011年度以前の入学生については、各学期30単位が履修登録上限となっていた。

【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。

- ・成績優秀者（の他学部科目履修）については年間履修登録上限を超えて履修登録が認められる。
- ・教職・資格科目については、1年次は16単位の登録上限があるが、2年次以降は登録上限はない。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き
- ・成績優秀者の他学部科目履修に関する資料

⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S A B

【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

- ・「フィールドスタディ」はPBLを実践する授業である。学部設立時から学部の特色ある科目として、重点的に取り組んでいる。
- ・「研究会」においてグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によって、アクティブラーニングが実践されている。
- ・新設されたSAプログラムにおいては、短期集中型の語学教育／異文化理解教育を実践している。
- ・新設された「キャリアチャレンジ」においては、実際の社会でのPBLに参画する機会が提供される。
- ・新設された「Co-Creative Workshop」においては、文化を異にする留学生と英語を通じたアクティブラーニングを実践する機会が提供される。

【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2016年度からは多様な学びの場を提供するために、以下のプログラム、科目が新設された。

- ・SAプログラムの新設
- ・「キャリアチャレンジ」の新設
- ・「Co-Creative Workshop」の新設

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） ・SAプログラム説明会資料 ・キャリアチャレンジ説明会資料 	
⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>（～400字程度まで）※どのような配慮が行われているかを記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「研究会」や「フィールドスタディ」などPBLやアクティブラーニングを実施する授業においては、定員を設け、学生の授業への積極的な参加を確保しつつより深い学びへと誘導する配慮を行っている。 ・語学授業についても定員を設け、学生の授業参加／発言の機会を確保し、語学能力の獲得に適した環境の整備をはかっている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） 	
⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シラバスは適正に作成され、作成に関する情報は教授会構成員間で共有されている。カリキュラム基本制度委員会のメンバーがすべてのシラバスのチェックを行った上で、学部執行部が縦覧している。とくに新設科目や問題のある科目については重点的にチェックしている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム基本制度委員会議事録 	
⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個々の授業の運営は原則として担当教員に委ねられているが、シラバスから逸脱した授業などに対する学生からの声を拾うために、授業改善アンケートの結果を学部執行部がチェックしている。 ・執行部／若手教員が中心となり、授業参観を行うことによって、シラバス通りの講義が行われているか、確認をしている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016年度 教員による授業相互参観実施状況報告書 	
2.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価はすぐれて担当教員の裁量事項であるが、A+からD、Eまでの評価割合は学部執行部として把握している。とくにA+の割合については、大学の基準を周知している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単位認定の規定を設けて適切に単位認定を行っている。さらに本学部到他大学等から編入する学生は、当学部の性格上、多様な大学や学部等の出身者がいるので、それらの学生にきめ細かく対応するために単位認定委員会を設置している。単位認定にあたっては、当該学生と委員会、執行部によって個別面談を実施し適切な単位認定および履修指導をすすめている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単位認定規定 ・単位認定個別面談日程表 	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。</p> <p>学部別に集計されたGPCAと全学のGPCAを教授会構成員に周知している。また、コース別のGPA分布を確認している。さらに、試験における不正行為を防止するために、定期試験における参照物についての申し合わせ事項を策定している。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録 ・コース別 GPA 分布 ・定期試験における参照物の取扱について 	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告があった学生に限定されるが、実績は把握している。 ・4年生に対しては進路が決定次第、大学に報告するように指導している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部パンフレット、HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shushoku/index.html) 	
2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データの把握主体：教授会執行部および教授会構成員 ・把握方法：学務部によるデータ、学部長会議で提示された資料 ・データの種類の等：成績上位者の分布、進級状況 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録 	
②学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>(～400 字程度まで) ※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等）。</p> <p>ゼミに所属する学生については、担当教員が受講態度やレポート、研究会修了論文等で随時、測定している。また 2016 年度からはゼミに所属していない学生にも卒業論文にあたる「コース修了論文」の執筆が可能となる制度を導入し、「研究会（ゼミナール）」に所属していない学生についても学習成果を把握するための体制を整備した。</p> <p>また、学部全体の大まかな傾向を把握するために、大学評価室卒業生アンケートの結果を教授会で確認している。</p>	
<p>【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「コース修了論文」の導入により、「研究会」所属以外の学生についても学習成果の把握ができる体制を整えた。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017 年度 人間環境学部 履修の手引き 	
③学習成果を可視化していますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドスタディ報告書を作成し、「フィールドスタディ」の全コースの実施状況を可視化している。 ・研究会における「研究会修了論文」の冊子化を行っている。 ・「研究会修了論文」のタイトルは、学部紀要（人間環境論集）および学部 HP で公開している。 	
<p>【2016 年度新規取り組み事項、前年度から変更や改善された事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「コース修了論文」の導入により、「研究会」所属以外の学生についても学習成果の可視化ができる体制を整えた。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017 年度 人間環境学部 履修の手引き ・フィールドスタディ報告書 ・研究会修了論文集 ・学部紀要（人間環境論集） ・人間環境学部 HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/thesis/index.html) 	
2.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

り組みを行っていますか。	
<p>(～400 字程度まで) ※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>教育課程およびその内容、方法の適切性については、カリキュラム基本制度委員会において定期的に点検・評価を行っている。また年度ごとに質保証委員会においても点検・評価を行っている。</p> <p>具体的には以下のような手法・データを用いて検証を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部として入試形態別の成績等を毎年検証し、その結果は教授会構成員で共有している。 ・「研究会修了論文」の執筆者数の把握をしている ・1 年次必修科目の「人間環境学への招待」において、入学直後（4 月）と春学期終了時（7 月）で独自の授業アンケートを行い、入試経路別に人間環境学部の学びに対する姿勢などについての分析を実施し、教育内容・方法の改善をすべく検証を行っている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム基本制度委員会議事録 ・研究会別 研究会修了論文提出率 ・2016 年度 人間環境学部・入学アンケート・集計結果 ・2016 年度 人間環境学部・終了時アンケート・集計結果 	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【利用方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業改善アンケート結果の利用は、主に担当教員に委ねられているものの、学部執行部がアンケート結果をチェックし、問題点の洗い出しのためにスクリーニングを行っている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録 	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ILAC 小委員会をカリキュラム基本制度委員会の元に設置し、カリキュラムの全体性の確保と ILAC カリキュラム改革に対応する体制を整備した。 	2.2 ③
<p>新規取り組みとして以下の 3 つがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「キャリアチャレンジ」の新設（3 団体との覚書に基づく学生の派遣。2017 年度より開始。） ・「SA プログラム」の設置（2017 年度秋学期に第 1 期の派遣予定） ・SCOPE プログラムとの共創授業「Co-Creative Workshop」の設置 	2.3 ①
<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム基本制度委員会の元で、カリキュラムマップ、ツリーを作成し、ナンバリングとあわせてカリキュラムの順次性・体系性をより明確なものとした。 	2.3 ②
<ul style="list-style-type: none"> ・とりわけ、コース制の枠内におけるカリキュラムツリーについては、コース制の実をあげるために重要と考えており、2016 年度に策定した原案を、新設予定のカリキュラムツリー／マップ小委員会で集中的に議論のうえ整備をすすめる。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・新科目「キャリアチャレンジ」を設置し、学生が社会に身を置き現実の問題に対処する機会を設けた。学生が実践知を学ぶ機会であると同時に、大学での学びをさらに自覚的にすすめるための契機となることが期待される。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・2016 年度からは従来秋学期の「基礎演習」において行われていた、大学での勉学に必要な基礎的リテラシー教育（リーディングとライティングの基礎）を、春学期の「人間環境学への招待」に移設し、よりスムーズな大学教育への接続を可能とするよう配慮している。 	2.3 ③
<p>以下の 3 点を 2016 年度より新しくカリキュラムに取り入れている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SA プログラムの設置（2017 年度秋学期より派遣開始） ・「Co-Creative Workshop」の設置 ・グローバルオープン科目の利用 	2.3 ④
<p>2016 年度には PBL をより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく「キャリアチャレンジ」を新設（2017 年度より開講）した。</p>	2.3 ⑤

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・より適切な修学支援のため留学生および社会人学生の新入生（編入学含む）に対するガイダンスをそれぞれ実施した。 ・「人間環境学への招待」におけるリーディング、ライティングの基礎の導入 ・「コース修了論文」の導入 ・「成績不振」学生に対する学習指導制度対象者の拡充（個別面談の対象となる学生の範囲を広げたもの） 	2.3 ⑥
<p>2016年度からは多様な学びの場を提供するために、以下のプログラム、科目が新設された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SAプログラムの新設 ・「キャリアチャレンジ」の新設 ・「Co-Creative Workshop」の新設 	2.4 ①
<ul style="list-style-type: none"> ・「コース修了論文」の導入により、「研究会」所属以外の学生についても学習成果の把握ができる体制を整えた。 	2.4 ②
<ul style="list-style-type: none"> ・「コース修了論文」の導入により、「研究会」所属以外の学生についても学習成果の可視化ができる体制を整えた。 	2.4 ⑤
	2.6 ②
	2.6 ③

(3) 現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

<ul style="list-style-type: none"> ・学習成果の把握、可視化についてさらなる充実を図る。特に、コース制指導における履修状況と、ゼミ外の学生の学習成果を把握／可視化する方策である「コース修了論文」の履修状況については注視する。 ・新設の英語学位プログラムを含め増加する留学生や社会人など、多様化する学生に対しては、引き続き学習／履修指導の充実を図る。 ・社会連携科目（「人間環境セミナー」、「フィールドスタディ」、「キャリアチャレンジ」等）の有機的な連携／運営を通じて学習成果の向上に努める。

【この基準の大学評価】

①方針の設定に関すること（2.1～2.2）

<p>人間環境学部の学位授与方針は、明確かつ具体的に設定されている。また、教育課程の編成・実施方針についても、初年次教育の仕組みや教育課程の編成と特色、学部のカリキュラム構造などが明示されており、適切である。</p> <p>教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針は、履修の手引き並びに学部パンフレットおよびホームページ上で周知・公表されている。</p> <p>教育目標を含む学部の理念や方向性については、戦略構想委員会において議論、検証を行っている。また、それらの理念や目標を各種方針および教育課程の編成・実施方針に反映する作業は、カリキュラム基本制度委員会において議論、検証が行われるといった役割分担が明確となっている。</p>
--

②教育課程・教育内容に関すること（2.2）

<p>人間環境学部の学位授与方針は、明確かつ具体的に設定されている。また、教育課程の編成・実施方針についても、初年次教育の仕組みや教育課程の編成と特色、学部のカリキュラム構造などが明示されており、適切である。</p> <p>教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針は、履修の手引き並びに学部パンフレットおよびホームページ上で周知・公表されている。</p> <p>教育目標を含む学部の理念や方向性については、戦略構想委員会において議論、検証を行っている。また、それらの理念や目標を各種方針および教育課程の編成・実施方針に反映する作業は、カリキュラム基本制度委員会において議論、検証が行われるといった役割分担が明確となっている。</p>
--

③教育方法に関すること（2.4）

<p>人間環境学部では、1年次教育での導入的な履修指導をはじめ、履修指導の体制及び方法は適切に行われている。</p> <p>初年次教育「人間環境学への招待」では、大学教育における講義の受け方、ノートテイキングの方法に加えて、2016年度からは、リーディング、ライティングスキルについても指導している。また、「基礎演習」においても、図書館実習や、</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

学部の学習指導上、重要な位置づけにある「研究会」での学びの基礎を習得させるなど、学生の学習指導は適切に行われている。

学生の学習時間を確保するための方策については、すべての授業において授業外で行うべき学習活動（準備学習等）が指示されており、その内容はシラバスによって周知されており、担当教員が適宜、指示をしている。また、1年間の履修登録単位数の上限は49単位であり、適切な設定となっている。

特徴的な授業形態の導入例としては、「フィールドスタディ」「研究会」「SAプログラム」「キャリアチャレンジ」「Co-Creative Workshop」等があり、いずれも教育上の目的を達成するために効果的であると判断できる。

「研究会」や「フィールドスタディ」などPBLやアクティブラーニングを実施する授業においては、定員を設け、学生数は配慮されている。

シラバスの適切性については、カリキュラム基本制度委員会のメンバーがすべてのシラバスのチェックを行った上で、学部執行部が縦覧することで検証している。

授業がシラバスに沿って行われているかの検証については、授業改善アンケートの結果を学部執行部がチェックする他、執行部や若手教員が中心となり、授業参観を行い、シラバス通りの講義が行われているか確認をしている。

④学習成果・教育改善に関すること（2.5～2.7）

人間環境学部の成績評価と単位認定の適切性の確認については、A+からD、Eまでの評価割合を学部執行部として把握したうえで、大学の基準を周知している。他大学等における既修得単位の認定については、規定を設けて適切に単位認定を行っている。きめ細かい対応をするため単位認定委員会を設置し、当該学生と委員会、執行部によって個別面談を実施している。

厳格な成績評価を行うための方策については、学部別に集計されたGPCAと全学のGPCAに加えて、コース別のGPA分布を教授会構成員に周知している。また、不正行為などの防止策を策定されていることは、評価できる。

学生の就職・進学状況の把握については、4年生に対しては進路が決定次第、大学に報告するように指導しており、適切である。

成績分布、進級などの状況については、執行部、教授会構成員が状況を把握しており評価できる。

学位授与方針に明示した学生の学習成果のを把握・評価について、ゼミ所属の学生については、担当教員が随時測定し、2016年度からはゼミに所属していない学生にも「コース修了論文」の執筆が可能となる制度を導入し、学習成果を把握するための体制を整備した。

学習成果の可視化については、「フィールドスタディ報告書」の作成や、研究会における「研究会修了論文」の冊子化を行っている。研究会修了論文のタイトルは、学部紀要（人間環境論集）および学部HPで公開しており評価できる。

教育課程およびその内容・方法の適切性の検証については、カリキュラム基本制度委員会において定期的に点検・評価を行っている。また年度ごとに質保証委員会においても点検・評価を行っている。

学生アンケート結果の組織的利用については、学部執行部がアンケート結果をチェックし、問題点の洗い出しのためにスクリーニングを行っており、今後の活用が期待できる。

3 学生の受け入れ

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

【学生の受け入れ方針】

■一般入試A方式・T日程・英語外部試験利用入試・大学入試センター試験利用入試

一般入試では、以下の各入試区分を通して、文系を基本としながら文理融合の側面も有する本学部の教育課程で学習することが可能な高等学校卒業程度の学力を考査する。

A方式：本学部の教育課程で学習することが可能な、主として文系の基礎学力を有していること。

T日程及び大学入試センター試験利用入試B方式：本学部の教育課程で学習することが可能な、主として文系の基礎学力を有しているか、または主として理系の基礎学力を有していること。

英語外部試験利用入試：語学能力の社会的な証明を前提として、本学部の教育課程で学習することが可能な、主として文系の基礎学力を有しているか、または主として理系の基礎学力を有していること

大学入試センター試験利用入試C方式：本学部の教育課程で学習することが可能な、文系及び理系の基礎学力を有していること。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

■推薦入試

推薦入試では、以下の各入試区分を通して、指定校及び付属校の学校長の推薦を前提として、文系を基本としながら文理融合の側面も有する本学部の教育課程で学習することが可能な高等学校卒業程度の学力とともに、本学部で学ぶ明確な目的意識を考査する。

指定校推薦入試：本学部が指定した高等学校の校長、本学部が指定した国内の日本語学校の校長、本学部が指定した国内の高等学校に相当する海外の教育機関の校長からの推薦を前提として、当該教育機関の平常評価で一定の学力を修得し、かつ本学部で学ぶ明確な目的意識を有していること。

付属校推薦入試：付属校の校長からの推薦を前提として、付属校の平常評価で一定の学力を修得し、かつ本学部で学ぶ明確な目的意識を有していること。

スポーツ推薦入試：高等学校の平常評価で一定の学力を修得していることを前提として、スポーツにおいて秀でた能力を有するとともに、学生競技者としてのスポーツに関する一定の見識と文章力、本学部で学ぶ明確な目的意識を有していること。

■特別入試

特別入試では、以下の各入試区分を通して、文系を基本としながら文理融合の側面も有する本学部の教育課程で学習することが可能な学力とともに、本学部で学ぶ明確な目的意識等を考査する。

自己推薦入試：高等学校の平常評価で一定の学力を修得し、かつそれまでの人生経験や社会活動等の経験などに基づく本学部で学ぶ明確な目的意識と、説明・対話能力を有し、さらに高等学校卒業程度の語学能力、本学部の教育課程に関連する高等学校卒業程度の文章能力を有していること。

社会人入試：ライフキャリアや職業キャリアに基づく本学部で学ぶ明確な目的意識と、説明・対話能力を有し、かつ社会常識や協調性等の社会人が持つべき素養を有していること。

外国人留学生のための入試：本学部の教育課程で学習することが可能な一定の基礎学力および日本語能力を有し、かつ本学部で学ぶ明確な目的意識を有していること。

国際バカロレア利用自己推薦入試：国際バカロレア資格に関する条件を満たし、本学部の教育課程で学習することが可能な一定の基礎学力および語学能力を有し、かつ本学部で学ぶ明確な目的意識を有していること。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

はい いいえ

3.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

はい いいえ

(～200字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

2016年度は、入学者の大幅増に対して、基礎演習と情報処理科目のコマ数を一時的に増やして対応した。従来どおり大学から提供される資料を、翌年度以降の入試方針に反映させている。2016年度は特に学生受け入れに関する中長期的ビジョンの作成に取り組んだ。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教授会議事録
- ・人間環境学部戦略構想委員会ニュース
- ・「入試政策に反映する一般入試の志願者数に関する参照基準 2017～2019年度」
- ・「人間環境学部入試戦略 2016」
- ・「2017年度（2016年度実施）人間環境学部入試政策」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

定員充足率（2012～2016年度）

（各年度5月1日現在）

種別\年度	2012	2013	2014	2015	2016	5年平均
入学定員	320名	333名	333名	333名	333名	
入学者数	364名	346名	338名	332名	*403名	
入学定員充足率	1.14	1.04	1.02	1.00	1.21	1.08
収容定員	1,280名	1,293名	1,306名	1,319名	1,332名	
在籍学生数	1,471名	1,469名	1,447名	1,433名	1,487名	
収容定員充足率	1.15	1.14	1.11	1.09	1.12	1.12

*秋入学者（SCOPE）8名を含む。

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ①学部・学科における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20以上	1.25以上
上記以外の分野	1.25以上	1.30以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告
すべての分野共通	0.9未満	0.8未満

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1.20以上	1.17以上	1.14以上	1.10以上
収容定員超過率	1.40以上	1.40以上	1.40以上	1.40以上

3.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S A B

(～400字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

- ・戦略構想委員会、広報・広聴委員会において、学生募集や入学者選抜の結果について検証し、検証結果については教授会にてさらに周知／議論を行っている。なお検証結果は、前者では学生の受け入れに関する長期的な戦略策定、後者では受験者への具体的な広報戦略にそれぞれ反映している。
- ・2016年度は戦略構想委員会において入試経路別の受験者確保に関する複数の政策文書を作成した。

【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・2016年度は戦略構想委員会において入試経路別の受験者確保に関する複数の政策文書を作成し、学生受け入れに関して定員超過・未充足の課題に対応するための基盤を整備した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教授会議事録
- ・人間環境学部戦略構想委員会ニュース
- ・広報・広聴委員会議事録
- ・「入試政策に反映する一般入試の志願者数に関する参照基準 2017～2019年度」
- ・「人間環境学部入試戦略 2016」
- ・「2017年度（2016年度実施）人間環境学部入試政策」

(2) 特記事項

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2016年度は入試経路別の受験者確保に関する複数の政策文書を作成し、学生受け入れに関して定員超過・未充足の課題に対応するための基盤を整備した。	3.3 ①

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

<ul style="list-style-type: none"> ・2016年度に整備された政策文書に基づき、広報・広聴委員会で学部教員の全面的な協力を得つつ着実に広報政策を実施していくこと。 ・入試区分毎に適正な定員を確保しつつ、全体の定員管理に引き続き努める。
--

【この基準の大学評価】

<p>人間環境学部の定員の超過・未充足に対する対応については、2016年度は、入学者の大幅増に対して、コマ数を一時的に増やして対応した。また、2016年度は学生受け入れに関する中長期的ビジョンの作成に取り組んだことは概ね評価できる。</p> <p>また、戦略構想委員会、広報・広聴委員会において、学生募集や入学選抜の結果について検証し、検証結果については教授会にてさらに周知・議論を行っている。その検証結果は、学生の受け入れに関する長期的な戦略策定や広報戦略にそれぞれ反映しており、改善・向上に向けた取り組みとして評価できる。</p>

4 教員・教員組織

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	
<p>【求める教員像および教員組織の編制方針】 (2011年度自己点検・評価報告書より)</p> <p>人間環境学部の教員は、学部の理念・目的を前提に、後述する教育目標ならびにディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーをよく理解して、教育・研究に従事することが求められる。</p> <p>本学部のカリキュラムは、5つの専門科目群を設け、学際的な履修プランの道標として4つのコース制を採用しているが、科目群やコース毎に、学科制のような教員の固定的な貼り付けはしていない。これは、個々が従来の専門の枠内に留まって教育研究に携わるだけでは、環境問題の学際的な教育は不可能なためである。環境問題の現場では分野の垣根を超えた協働が必要であることに倣って、本学部においても、役割を固定化しない、横断的で柔軟な組織編制を今後も模索してゆく。市ヶ谷基礎科目を主担当とする教員比率は今でも他学部に比して高いが、このことが学部の専門教育に差し支えないよう、全教員が原則として初年次教育の「基礎演習」を担当し、市ヶ谷基礎科目の主担当者であっても必ず専門の授業とゼミナールをもつことにしている。他にフィールドスタディないし人間環境セミナーは全教員が参画することを原則とし、専門教育の導入にあたる1年次の「人間環境学入門」「環境科学入門」も、輪番によりほぼ全教員が受け持つ。こうして教員個々がカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを理解しながら、1年次から卒業まで学生の教育に対して責任を多面的に果たす態勢の維持・充実に努めていく。</p>	
①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【根拠資料】 ※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専任教員の募集について (公募文書) ・専任教員の昇格に関する申し合わせ 	
②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部執行部の構成：学部長—教授会主任—教授会副主任 ・学部内の基幹委員会の名称・役割 ・戦略構想委員会：長期的な視野に基づき、学部のさまざまな戦略について構想する 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・カリキュラム基本制度委員会：カリキュラム全般に関する基本制度を検討する
 - ・フィールドスタディ委員会：フィールドスタディの企画、運営に関して検討する
 - ・SA 委員会：SA プログラムの企画、運営に関して検討する
 - ・広報広聴委員会：学部の広報広聴に関する作業を行う
 - ・人事委員会：学部の人事全般に関する事項を行う
 - ・責任体制：学部執行部が教授会に対する包括的な責任を負う。また、執行部から一部の事務執行を各種委員会に対して委任するとともに、当該領域における諮問組織として審議を委ね、各教員の意見徴収を行っている。ただし、人事委員会は3名の選挙によって選出された委員と、学部長と教授会主任を加えた5名によって構成され、合議制により人事に関する事項について協議、決定を行い、専管事項については教授会に対して独立した権限を行使する。
- 【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。
- ・2017年度各種委員会委員名簿

4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。 はい いいえ

(～400字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

教員像：学問分野は異なっても、持続可能性に関わる教育・研究・社会的な実践への従事が可能であること。さまざまな学問分野と協調し、分野を超えて学際的な学部を担うことができること。

教員組織の編制方針：戦略構想委員会、カリキュラム基本制度委員会、人事委員会などと協議しながら、欠員を補充し、適切な教員編制に努めている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016年度 人間環境学部 専任教員専攻分野および年齢分布
- ・人間環境学部 人事戦略 (2017年3月22日)

②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。 はい いいえ

(～400字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

専門科目を担当する教員の採用にあたって、市ヶ谷基礎科目を主に担当する教員以外は、大学院科目の担当が可能なように、公募書類にも明示してある。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・専任教員の募集について (公募文書)
- ・人間環境学部 人事戦略 (2017年3月22日)

2016年度専任教員数一覧 (2016年5月1日現在)

学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
人間環境	24	7	0	0	31	18	9

専任教員1人あたりの学生数 (2016年5月1日現在) : 48.0人

③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。 はい いいえ

【特記事項】 (～200字程度まで) ※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

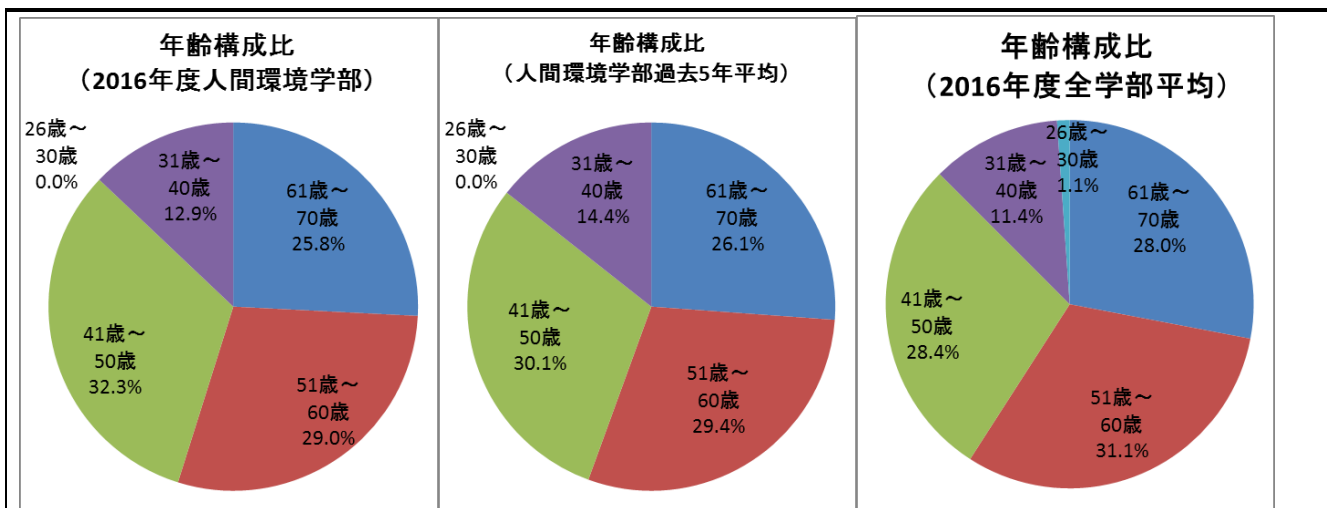
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・専任教員職位および年齢表
- ・2016年度 人間環境学部 専任教員専攻分野および年齢分布
- ・人間環境学部 人事戦略 (2017年3月22日)

年齢構成一覧 (2016年5月1日現在)

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2016	0人	4人	10人	9人	8人
	0.0%	12.9%	32.3%	29.0%	25.8%

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。



4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

①各種規程は整備されていますか。

はい いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- ・人間環境学部人事規則
- ・法政大学人間環境学部学部長選出規則
- ・人間環境学部任期付教員採用に関する規則
- ・人事に関する細則
- ・教授会の決議に関する覚書
- ・兼任・兼任教員への委嘱に関する申し合わせ
- ・「在外研究員」及び「国内研究員」等に関する派遣候補者選定に関する申し合わせ
- ・専任教員の昇格に関する申し合わせ
- ・専任教員の定年延長に関する申し合わせ
- ・専任人事の進め方に関する覚書
- ・「教授会規程」の解釈（申し合わせ）学部長の任期等について
- ・兼任教員の採用基準に関する申し合わせ
- ・人間環境学部 人事戦略（2017年3月22日）

②規程の運用は適切に行われていますか。

はい いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。

- ・人事規則にもとづいて人事委員会を設置している。人事委員会と教授会は下記に述べる各種規則および申し合わせ事項を適切に運用している。
- ・学部において、教員の募集・任免・昇格に関連した各種規則を整備しており、これらの各種規則および申し合わせ事項にもとづいて教員の募集・任免・昇格が適切に行われている。

4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・カリキュラム・基本制度委員会において、学部内のFD活動に関する検討を行っている。
- ・なお、FD活動を組織的に進めるために、2016年度にカリキュラム・基本制度委員会の小委員会として、FD推進チームを立ち上げることを決定した。

【2016年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・若手教員による授業相互参観
- ・カリキュラムツリー／マップ作成のための検討会（計3回（1月26日、2月22日、3月24日）、計20名程度（のべ人数）が参加。）

【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・2016年度にFD推進チームを設置し、若手教員を中心にFD活動を深めるための検討をすすめている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・カリキュラム基本制度委員会議事録
- ・2016年度 授業相互参観実施報告書
- ・人間環境学部 人事戦略（2017年3月22日）

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2016年度より若手教員を中心にFD推進チームを設置し、FD活動の充実に取り組んでいる。	4.4 ①

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度から2018年度に学部設置時から在籍していた教員のうち数名が退職を迎える。今後その補充人事について専門性、年齢構成など多様性に配慮した検討を行い、2016年度に策定した人事戦略に基づき採用を実施する必要がある。

【この基準の大学評価】

人間環境学部の採用・昇格の基準等については、公募文書や専任教員の昇格に関する申し合わせで明示されており、適切である。

組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在についても、学部内の基幹委員会の役割が明確になっており、学部執行部が教授会に対する包括的な責任を負うとされている。

学部のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていると判断できる。また専門科目を担当する教員の採用にあたって、一部の教員以外は、大学院科目の担当が可能なように、公募書類にも明示しており、教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮している。

学部の年齢構成比も問題ない。また教員に関する規則を整備しており、これらの各種規則および申し合わせ事項にもとづいて、人事委員会、教授会において、教員の募集・任免・昇格が適切に行われていると判断できる。

学部内のFD活動については、カリキュラム・基本制度委員会において検討を行っている。

なお、FD活動を組織的に進めるために、2016年度にカリキュラム・基本制度委員会の小委員会として、FD推進チームを立ち上げ、若手教員による授業相互参観やカリキュラムツリー、カリキュラムマップ作成のための検討会（計3回）が行われていることは、評価できる。

5 学生支援

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。 はい いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・データの把握主体：教授会執行部および教授会構成員
- ・把握方法：学務部によるデータ、学部長会議で提示された資料
- ・データの種類の：進級状況

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教授会議事録

②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。 S A B

(～400字程度まで) ※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスマナー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。

- ・初年度教育の一環として秋学期に「基礎演習」では担任制を用いて1年生の修学支援を行っている。
- ・同じく初年度教育の一環として、理系分野のレメディアル科目として「サイエンスカフェ」を設定している。
- ・オフィスマナーを全教員が設け、学生からの相談に応える体制をとっている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・社会人学生に対しては、社会人学生支援担当（教員2名）を設置し社会人学生向けのガイダンスを実施した。また社会人向けの「基礎演習」および「研究会（ゼミナール）」を設置し、より多様なニーズに応える体制をとっている。 <p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会人学生に対しては、社会人学生支援担当（教員2名）を設置し社会人学生向けのガイダンスを実施した。また社会人向けの「基礎演習」および「研究会（ゼミナール）」を設置し、より多様なニーズに応える体制をとっている。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き ・2017年度 各種委員会名簿 	S A B
<p>③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。</p> <p>【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次の学生に対しては、「基礎演習」において欠席回数が多い学生をチェックしている。欠席回数が多い学生に対して個別に電話等で連絡をとり、学生が置かれている状況を把握している。これにより、深刻な成績不振に陥る前の早い段階での対応が可能になる。 ・学習指導委員会において、GPA0.8以下の学生を呼び出し、面接を実施した。また、GPA1.5以下の学生については、注意喚起の文書通知を学生および保証人に対して行った。 <p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「成績不振」学生に対する学習指導制度対象者の拡充（個別面談の対象となる学生の範囲を広げたもの） <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き ・「成績不振」学生に対する学習指導制度対象者の基準変更について 	S A B
<p>④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。</p> <p>（～400字程度まで） ※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。</p> <p>2014年度までに外国人留学生入試の制度改正を実施し、外国人留学生が増加することが予想されたため、2016年度より留学生アドバイザーを設置することを決定した。2016年4月初旬に、在校生の留学生も含めて、留学生ガイダンスを実施した。具体的には以下の新しい取り組みを実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・留学生アドバイザーとして2名の教員を配置（中国語、韓国語）。留学生ガイダンスを実施した。また「基礎演習」や「研究会（ゼミナール）」において、留学生に留意した指導体制を構築した。 ・留学生の精神的ケアに対して、英語学位プログラム（SCOPE）の教員と連携する体制を試み、学習指導委員会との連携も図っている。 <p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・留学生アドバイザーとして2名の教員を配置（中国語、韓国語）。留学生ガイダンスを実施した。また「基礎演習」や「研究会（ゼミナール）」において、留学生に留意した指導体制を構築した。 ・留学生の精神的ケアに対して、英語学位プログラム（SCOPE）の教員と連携する体制を試み、学習指導委員会との連携も図っている。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年度 各種委員会名簿 	S A B

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・社会人学生向け修学支援の充実	5.1 ②
・成績不振学生への修学支援の拡充	5.1 ③
・外国人留学生に対する修学支援の充実	5.1 ④

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・社会人学生や留学生など多様化する学生のニーズに対応する体制は整えられているので、その活動/利用状況について
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

随時モニタリング／点検することが望ましい。

【この基準の大学評価】

人間環境学部の卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況の把握については、学務部のデータを執行部、教授会構成委員で把握している。

学生の修学支援の取り組みとしては、基礎演習・サイエンスカフェ・オフィスアワーなどで、学生からの相談に応える体制をとっていることに加え、社会人支援担当を設置するなど多様なニーズに応える体制をとっており、概ね評価できる。

成績不振学生に対する対応については、1年次の学生に対しては、「基礎演習」で欠席回数が多い学生に対して個別に連絡を取り、状況を把握している。また、学習指導委員会において、GPA0.8以下の学生を呼び出し、面接を実施した。また、GPA1.5以下の学生については、注意喚起の文書通知を学生および保証人に対して行った。2016年度より「成績不振」学生に対する学習指導制度対象者を拡充したことは評価できる。外国人留学生の修学支援については、留学生アドバイザーを設置し、ガイダンスの実施を行い、指導体制を構築した。また留学生の精神的ケアに対して、学習指導委員会と連携している。

以上、学生支援の体制は、概ね評価できる。

IV 2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		教員・教員組織
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> ・2017年度から2018年度に、学部設置時から在籍していた教員のうち数名が退職を迎えるため、その補充人事について検討する必要がある。 ・次世代教員によるFDの推進を図る。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・学部設置の戦略構想委員会や教授会での議論を踏まえて、人事委員会が2016年度中に人事戦略を策定する。 ・次世代教員中心でFD推進チームを作り、授業の相互参観を実施し、かつ学部の教育体系に関する話し合いを行った。また、次世代教員による、履修モデルに採用できるカリキュラムツリー・マップの作成を行い、学部のカリキュラムの理解と改善を行った。
	質保証委員会による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・学部が転換期にあり、中長期的な人事戦略の策定することは、重要である。 ・次世代教員によるFD活動は、カリキュラム体系の検討および、学際学部らしい授業の質的向上（複数教員による授業の実施）に寄与するものと考えられる。
評価基準		教育課程・教育内容
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> ・留学生の増加に伴う、指導・ケアなど学部内の受け入れ体制の整備を行うこと。 ・社会人学生の増加に伴う、指導・ケアなど学部内の受け入れ体制の整備を行うこと。 ・新しいコース制の適切な運用と検証を行うこと。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生に対しては、留学生アドバイザーとして2名の教員（中国語、韓国語）を設置し、留学生ガイダンスを実施した。また、基礎演習、研究会（ゼミナール）などに対して留学生に配慮した指導体制を構築した。さらに、留学生の精神的なケアに対して、英語学位プログラム（SCOPE）の教員と連携する体制の構築を試みた。留学生の指導・ケアについては、学生指導委員会と連携して実施した。 ・社会人学生に対しては、社会人学生支援担当を設置し、社会人学生へのガイダンスを実施したほか、社会人用の基礎演習、研究会（ゼミナール）を設置した。 ・新しいコース制は、学部執行部を中心に運用し、コース制の課題については、カリキュラム基本制度委員会で随時、審議を行った。
	質保証委員会による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生、社会人学生に対する指導体制については、担当した教員の細やかな対応によって、一定以上の成果を上げている。留学生への指導、ケアに対しては、学習指導委員会との連携を今後はより密に行い、成績不振とメンタル問題の関係などを早期に発見することで、留学生への対応を充実させることが望まれる。 ・新しいコース制については、執行部およびカリキュラム・基本制度委員会で運用上の課題を解決する努力が続けられ、コース制の運用については十分な成果を上げている。課題としては、これらの点を学部専任教員全員が熟知することであり、2年目以降の課題である

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		と考えられる。
評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> FD 推進チームによる、教育方法の検討を行うこと。 授業アンケートについては、マスキングがなくなることへの執行部としての対応を図ること。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> 次世代教員中心で FD 推進チームを作り、授業の相互参観を実施し、教育方法の改善の動機付けとした。 カリキュラム体系に関するワークショップを FD 推進チーム、次世代教員中心で行った。 授業アンケートがマスキングがなくなることに對して、執行部としては守秘義務を守りつつも、課題となる科目、教員に対して、授業の改善に向けた方策を具体的に実施した。
	質保証委員会による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> 次世代教員および、FD 推進チームによるワークショップの成果が教育方法の改善につながることを期待される。 人間環境学への招待、人間環境セミナー、フィールドスタディと、学部的主要科目に関して、複数の教員が担当し、教育内容・方法に関して、有機的なつながりを生み出すことができ、学際的な学部教育方法の質的な向上に資すると考えられる。 教員間の相互学習は、科目間の相互連環の認識が重要な、本学部の教育方法の改善にとって重要であると考えられる。 授業アンケートの運用に関しては、執行部が中心となり、適切に運用されている。
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> 新コース制の履修状況を確認すること。 コース修了論文の提出状況を把握すること。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> 新コース制における学生の科目履修傾向については、コース登録が完了した 2017 年度に明らかになる。 2016 年度新設のコース修了論文の提出状況については、1 名であった（なお、研究会修了論文は 140 名が提出した）。研究会 A に属さない学生に対して、研究会修了論文に相当する論文を提出する制度が本格的に機能するのは 2017 年度以降と考えられる。
	質保証委員会による点検・評価	新コース制における学生の科目履修傾向、コース登録の状況およびコース修了論文の提出状況については、2017 年度に継続して把握し、検証に努める必要がある。
評価基準		学生の受け入れ
現状の課題・今後の対応等		一般入試、特別入試における、各入試経路別の受験者の確保に関する長期ビジョン、および広報戦略の策定を行う。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	学部長を委員長とした、戦略構想委員会において、入試経路別の受験者確保に関する政策文書を作成した（「入試政策に反映する一般入試の志願者数に関する参照基準 2017～2019 年度」「人間環境学部入試戦略 2016」「2017 年度（2016 年度実施）人間環境学部入試政策」）。また、これらの政策文書に基づき、2017 年度入試に関する広報政策について広報広聴委員会に対して指示した。具体的な活動については同委員会に委ねた。
	質保証委員会による点検・評価	入試政策および広報政策によって、2017 年入試においては、昨年度比 1.5 倍に迫る志願者数となった。この数字は、入試日程（T 日程と A 日程が間 1 日しかない。入試日程の前半で実施された入試）を勘案すると、学部創設以来最大の志願者数であり、学生受け入れに関しては、かなりの成果をあげたと考えられる。
評価基準		学生支援
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> 外国人留学生のより効果的な修学支援を実施する。 社会人学生の効果的な修学支援を実施する。 障がいのある学生への修学支援のあり方について検討を進め、速やかに実行に移す。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	外国人留学生向けの履修ガイダンスを実施し、日本で学ぶことの不安を解消させるような履修指導を行った。また、留学生が参加しやすい基礎演習、研究会（ゼミナール）を配置した。さらに、英語学位プログラム（SCOPE）の任期付教員が、SCOPE 生向けに実施したイベントにおいて、日本語プログラムの留学生も対象とするなど、外国人留学生の交流を働きかけ、修学支援の一助になるように企画した。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会人学生に対しては、社会人専用の基礎演習、研究会（ゼミナール）を開催した。 ・ 障がいがある学生への修学支援については、関係部局との協議を行いつつ、関係教員と協力し対応した。
質保証委員会による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 外国人留学生、社会人学生に対する修学支援によって、組織的に実施されていなかった時期と比較して、格段に成果を得たと考えられる。 ・ 障がいがある学生への対応は、執行部が中心となり、科目担当教員に周知された結果、大きな問題もなく、円滑に修学がなされたと判断できる。

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

人間環境学部の社会人学生及び留学生支援の対応として、新入生ガイダンスを実施したことは評価できる。教員補充人事については、専攻分野、年齢分布を考慮しながら引き続き適切な検討、人選がなされることを期待したい。また、FD推進チームによる教育方法の検討がなされ、さらに、入試経路別の受験者の確保に関する長期ビジョンについても、学部の各委員会や教授会にて議論、検証がなされ、一定の方向性がでることを期待したい。

【大学評価総評】

人間環境学部は、「人間と環境の共存」と「人間と人間の共生」が両立した「持続可能な社会」の構築を理念とする文系の総合政策学部であり、本学の社会貢献のビジョンである「持続可能な地球社会の構築」の社会におけるセンターとなるための学部である。

2016年度は、全学の方針等を踏まえた学部長期構想を策定し、学部運営および改革に継続的に注力されており、さらには英語学位プログラム（SCOPE）開設、短期海外留学のSAプログラム、実践知を育むための新科目を創設し、今後も社会人の継続的な学びに向けた新プログラム（RSP）設置準備など、新たな試みに学部をあげて取り組まれてきた。カリキュラムの編成は、5つのテーマ領域から成るコース制が中心であるが、これに国内外のフィールドスタディや研究会、さらに、グローバル・サステナビリティコースのコースコア科目やSA、SCOPEとの相互乗り入れ科目等の編成により、グローバルな人材への体系的な教育機会も提供している。リテラシー科目と展開科目の構成も充実している。

2016年度の大学評価結果において、新コースの履修状況の確認と修了論文の提出状況の把握について指摘を受けたが、これらへの対応として、カリキュラムマップ、カリキュラムツリーの整備充実と並行して、履修状況の確認、コース修了論文の提出状況の把握を行うことが記述されており評価できる。

自己点検・評価シートの完成度も高く、FD活動や質保証活動についても積極的に活動されているように見受けられるが、そうした活動を通じてのネガティブな点を含めての「気づき」やその改善のための方策、例えば、「学部執行部がアンケート結果をチェックし、問題点の洗い出しのためにスクリーニングを行った」結果の概要の記述や、その改善のための方針の検討など、一層の実質的な点検・評価活動が望まれる。

なお、学部長期構想の内容については、他学部にも参考となる取り組みであり、ぜひとも全学的に公表を検討していただきたい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。